

● 優秀賞

効果的な言葉で表現するための テレビ番組と合成写真の利用

茨城県水戸市立国田小学校 ましこ さえか
益子佐絵香

1 | はじめに

「先生、匂いとか風とかが出てくるようなテレビが、そのうちできるかな」

テレビ好きの子どもたちが楽しそうに話している。

そうだね、と笑いながら相づちを打っていると、「でも、見ていて匂いとかが分からなくても、どんなかなあって考えるのは楽しいよ」という声があがった。想像する部分が映像をよりおもしろくしているのかもしれない。

子どもたちが毎日のように接しているメディアのひとつに、テレビ番組がある。

何気なくつけていても、次々に移ろう画面から、映像、音、時には字幕など、私たちが受け取る情報は夥しい。そんな情報の溢れる日常において、情報を鵜呑みにする受動的な姿勢を心配する声も聞こえてくる。

だが、それらの情報をただ受け取るだけでなく、今度は自分の表現のために活かし、発信することができたら、想像力がより高まるのではないか。

そこで、単元の前半では、テレビ番組の分析を静止画・動画(音有り)・動画(音無し)の3段階に分けて取り組んだ。映像を相手に効果的に伝えるには、どのような言葉で表現するのがふさわしいかを考えるためである。

また、後半では情報の受け手としての立場から一転し、前次で培った言葉に対する判断を、今度は自らが架空のレストランのシェフとしてお客に勧める品書きづくりに活用することにした。その際、お客の五感に料理のお

いしさをうったえる効果的な表現の一環として、デジタルカメラやパソコンで料理の合成写真を作成し、添え書きとともに発表しあうことにした。映像と文章の両方を組み合わせた情報の発信者となることで、それぞれのメディアの向こう側にいる制作者の思いに気づく、または日々の表現に活かすことをめざした。

2 | テレビ番組を分析し、言葉と映像の関わりを探る(2時間)

(1) 料理番組のひみつをさぐる

授業のはじめに、架空のレストランをそれぞれ考え、自分が料理人として世界にたったひとつしかない夢のメニューを合成写真で作ることを説明した。レストランの名前が工夫してつけられた。おいしさを料理人自らお客に伝えるためには、どのような言葉で表現したらよいのか、という技を磨くため授業の一步を踏み出した。(以下『 』は教師の言葉、「 」は子どもの言葉である。)

『さあ、それではこの料理をみんなで味わってみましょう』

教室のテレビ画面には、皿に盛りつけられた鮎の洗いの静止画面が映っている。音声はない。

「えーっ、どうやって食べるんですか」

「本物が出るんですか」

『本物だったら良かったけれど。今日は、口を使わずに目で見て「おいしそうだなあ」ということを言葉にしてみます』

— 板 書 —

「おいしそうだなあ」テレビの料理番組のひみつを探ろう。

— 指 示 —

この料理の映像を見て、思いうかぶ言葉をメモにしてみよう。

配られたワークシートは、映像を分析するための欄が3つに区切られている。子どもはそのうちの上段に思いつくまま言葉を書き込んでいった(資料1)。

発表してみると次のような言葉が挙げられた。

- ・顔がついていてすごい
- ・おいしそうにみえる
- ・さしみだけでなく、他のものも盛りつけてあっておいしそう
- ・いろいろなものがのっていて鮎が普通の鮎じゃないみたい
- ・見ているだけでも食べたくなる感じ
- ・頭からしっぽまであってすごい
- ・わさびが辛そう
- ・こりゃあ、ごうかいでおいしそうですね
- ・魚が丸ごと一匹!

『この中で料理のおいしさが伝わってくる言葉はどの言葉ですか』

それぞれ言葉に線を引き、互いに比べあった。

「映像は同じ魚なのに、おいしいと思う言葉がいろいろあるんだね」

「魚だけじゃなくて、わさびを見ていた人もいるよ」

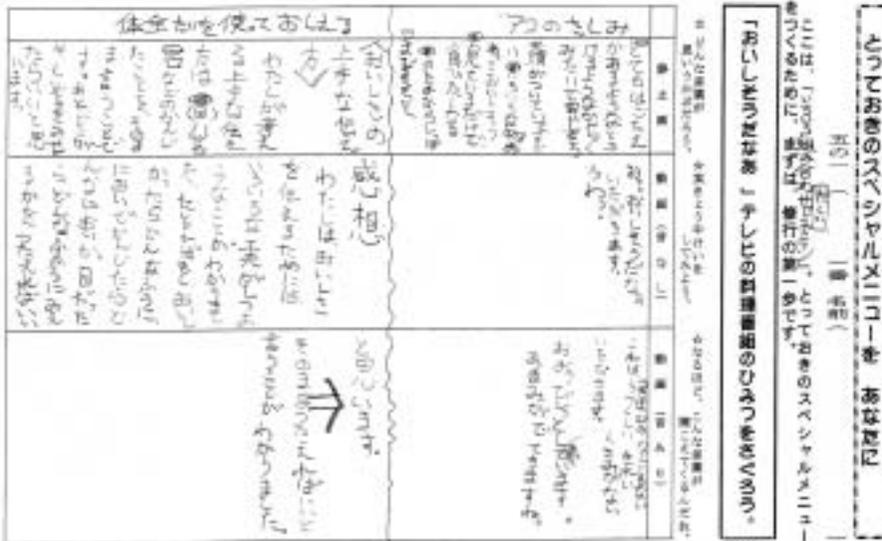
「まわりの飾り付けを見たんだね」

「そうか、僕は画面の真ん中を見ていたよ」

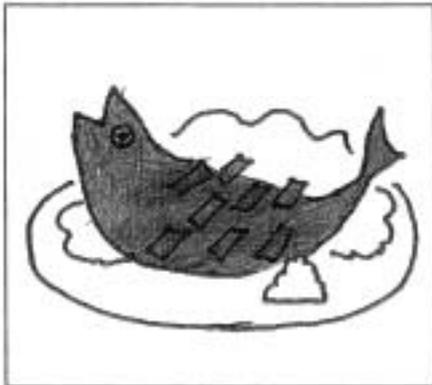
同一の静止画から受ける印象が、人それぞれであることが分かった。また、同じ映像でも画面のどの部分に特に注目しているのか、見ている部分の相違に気がつき、話し合いがもたれた。

そこで、料理の図を簡単に描き、自分が料理のどこに注目して文章を書いたか、あらためて振り返ってみた。友達と比較しやすいように、その部分を赤で印を付けた(資料2)。

すると、画面中央の「魚の真ん中」「魚全体」と画面周囲の「盛りつけ方」と画面下の「添えてあるもの」の3つのパターンに分けられた。同じ画面でも受け取る情報は違うのだということが分かった。それは、見る側の興味が違うからという意見も出た。新たな発



●資料1/ワークシート



☆画面で特によく見ていたところ ☆画面で特によく見ていたところ

●資料2／画面の注目している部分

見である。

— 指 示 —

映像を見て、おいしさを伝えるナレーションを書いてみよう。

引き続き今度は、音が一切流れない動画だけの画面を見て、実際に食べている出演者の様子を見ながら、自分で味を想像し、ナレーションをつけることに挑戦した。

『レポーターの人が料理を味わっていますね。自分がレポーターになったら、どんなことを言いながらおいしさを伝えますか。書いてみましょう』

静止状態だった鮎の洗いから、出演者ら（レポーターとシェフ）が何か会話をしながら料理の紹介が進んでいく動画になった。切れのいいところまでは1分弱の映像である。

しかし、番組上ではコマの送り方が速いの

で、書くことが追いつかない子どもがほとんどだった。3, 4回繰り返して見たが、ワークシートを作る際に、各シーンの図を順番通りに並べておき、そのわきに言葉を書けるようにしておいた方が良かったと反省している。

— 流れた映像 —

醤油と刺身のアップ→食べる様子→刺身のアップ→わさびのアップ→たれのアップ

記入したのは、ワークシートの中段「動画（音なし）」の欄である。

では、どのような言葉が書かれたのだろうか。

ワークシートにナレーションとして書いた文章

- ・おっ、おいしそうだなあ。いただきます。うわっ。
- ・さしみが光っていたりしてすごく食欲が出そう。
- ・すごくおいしくておいしくて目がたれそう。
- ・わさびと鮎のさしみをいっしょに食べるとさっきよりおいしい。
- ・お、できましたね。ぴちぴちしておいしそうです。2つたれがあるんですけど、何ですか？
- ・これはおいしい。わさびと相性がいいですね。
- ・さっぱりしていておいしい。
- ・おお、この味、何とも言えない。
- ・わさびが辛くておいしい。
- ・しょうゆとわさびが混ざっておいしいですね。
- ・いい菌ごたえでプルプルです。
- ・おいしい味が2種類楽しめているなあ。
- ・うーん、菌ごたえがあっていいですね。
- ・おー、口の中でとろけますね。
- ・これは味もいいし、食感もいい。刺身に合うたれがあって、とてもおいしい。
- ・いろいろ菌ごたえがしますね。

次に、ワークシート上段の「静止画」でメモした自分の言葉と比較した。

『静止画と動画では、どのように言葉が変わってきたかな』

「歯ごたえを書いた人が多いね」

「(今のは)音がなかったけれど、食べている人は本当においしいと言ってるように食べていました」

「そうそう、味が分かる感じがする」

「うん。すごくおいしい顔だったから、どんな味か書きやすかった」

『なるほどね。人が出てきて想像しやすくなったんだね』

映像情報が増えた分、言葉が増えた。また、言葉自体も「プルプル」「ぴちぴち」「とろける」などのより具体的なことを伝えようとするものに変化した。静止画像では物だけが写っていたのに対し、動画では料理をめぐって会話をする2人の人物が写っていた。そのためか、相手に話しかけるような生き生きとした言葉が登場したと思われる。伝える相手がいるかいないか意識することで言葉が変わることに気づいた。

(2)「わさびは〇〇い」って本当？

第2時は、気になるレポーターの言葉を実際に音声として聞いてみることにした。

指 示

レポーターの味わっている言葉を注意して聞いてみよう。

これまで音のなかった画面から、さまざまな音が聞こえてきた。いきいきと料理を伝えるレポーターの声が弾んでいる。説明を添えるシェフの声もおいしく食べる人を前に嬉しそうである。通して見たあと、解説を加えながら各シーンを見ていくストップモーション方式で話し合った。

『何と書いていましたか』

「美しいですよ、でした」

「それから、きれいですよね、って」

『そう、まず、食べる前に見た目の感想を言っていたのですね』

「ほんとに何分前まで泳いでいたんですね、って言うから、すごくいきのいいことが分かる」

「身がびしっとしていて、臭みがない」

『鼻をつかって匂いも伝えているのですね』

話し合いが進むにつれて、自分たちが予想もしなかった言葉に次々と出会い、驚いている様子が見られた。平面のテレビ画面では、情報を受け取る側は視覚と聴覚で感じることはできない。しかし、レポーターが画面からは漂わせられない匂いを、嗅覚で感じた情報として言葉で表現し、伝えていることに気づき、感心している発言もあった。

動画は、さらにコマ送りをして先に進んでいく。今度は、添えてあるわさびについての話し合いになった。

「わさびが甘いって言ってました！」

「うん。最初は辛いけど、後で甘くなるって、ねっ」

『本当ですか？ わさびは辛そうってYさんはナレーションで書いてましたよね？』

「はい、辛いのがわさびです」

『甘いと予想して自分のナレーションを書いた人、誰かいますか』

不思議そうな表情で、首を横に振る子どもたち。

予想を裏切る「わさびは甘い」発言のあと、レポーターの言葉にぐっとひきつけられた。巻き戻して何回も同じ場面を聞いてみた。確かに「甘い」らしい。

「へえ、そうだったんだ」

『「最初、くっつきながら後でふわーんと甘い」って言ったから、はじめは辛いんだ、きっと』

「そうだね、辛いって言ってない」

「くっつきた、って鼻の奥にきたのかな？」

「くっとかふわーんとかって面白いね」

映像だけでは伝えきれないもの（ここでは

料理のおいしさの具体性)を、誰かが言葉で補うことにより、効果的に伝えられることをあらためて感じた。

映像は何かを語る。音がなくても、目に見えるようにすることで周囲に伝わるものがある。それに加えて、ものを見、感じる人間が伝える言葉があるからこそ、情報を受け取る側の見方が広がったり、想像がふくらんだりということが可能になるのである。

ここで、一転「おいしい」という言葉のみで報告した料理番組の録画を視聴した。

— 指 示 —

2つの番組を比べて、伝え方の工夫を考えよう。

『どちらの伝え方が、情報を受ける私たちには分かりやすいですか』

「(Aの番組は) 歯ごたえとか、匂いとかの言葉がもっとあったらいいのに」

「どんなふうにおいしいのかが分かるのは、体全体をつかった方がいい」

「ただ『おいしい』だけでは、よく分かりません」

「おいしい、とそれだけだと、こっちも『ああそうか』だけで終わってしまう」

おいさを伝えるためには、目・口(味・歯ごたえ・温度など)・鼻・耳・たとえなど、人が感じたものを言葉にする必要があることを話し合った。ワークシートのそれぞれの段階で記入したものに、これらの「五感」マークをつけてみたところ、以下のことを確かめることができた。

- ・静止画の時は、ほとんどが目を使って書いている。
- ・動画(音なし)の時は、だんだん歯や鼻や口のマークが増えた。
- ・レポーターはほとんどのマークが入っている。

そこで、次のようななげかけをした。

『では、静止画でも十分に料理のおいしさ

を伝える挑戦をしてみよう』

3 写真を合成し、効果的な言葉で表現する(4時間)

(1)ここからがいよいよ君たちシェフの腕の見せどころ

どんなメニューでも作れるシェフとして、早速写真の合成に取りかかった。

— 指 示 —

世界にひとつしかないとおきのスペシャルメニューをつくらう。

まず、雑誌や広告の中から、自分が使いたい料理や菓子の写真を数枚選び出した。料理の本など切り抜くことが難しいものについては、スキャナーで読み込んだり、デジタルカメラで撮影し、印刷したものを用いた。これらの組み合わせを考え、重ねたり、切り貼りをしたりしていった。素材の大きさにこだわり、もっと大きく加工したい時にはデジタルカメラで撮影し、引きのぼしてから使う様子も見られた。切り貼りだけで補えないところは自分でイラストを描いて想像の広がるままに、メニューを仕上げていった。

作品を組み立てながら(写真1)、ぶつぶつと説明をすでにつぶやく子どもも多く見られた。写真を手に、頭の中でどんな言葉がふさわしいのかを考えていった。

「これは朝ご飯を食べないでレストランに



●写真1/画用紙上につくられた料理

きて欲しいな」(どうして?)

「こんなにいっぱいフルコースだから。たくさん食べて行って欲しい」(なるほどね)

「気合いを入れてつくったから、残さずに食べて欲しいんだ」

こうして、平面の画用紙上に、色鮮やかでユニークな料理の数々が顔を揃えた。

(2) 自慢のメニューを紹介します

次に、写真のメニューができあがると、いよいよ今度は紹介文を書くことに取り組んだ。このとき、テレビのレポーターがどのようにおいさを伝えていたかを思い出しながら言葉選びをしていた(写真2)。

添え書き用のワークシートは5種類のデザインの中から、自分の料理の雰囲気にあったものを選んで書くことにした。その際、レス



●写真2/料理に添え書きを書く

トランの名前とメニューの名前を必ず書くこと、自分の名前は「料理人(シェフ)〇〇〇〇」と書くことにした。

いったん書き出してみると、「何を書こうかな」「はじめはどうしよう」など、考え込んでいる子どもはほとんどいなかった。切り貼りをして並べているうちに、自然と頭の中にかんできた言葉が鉛筆から流れ出るように、次々と綴られていった(資料3)。

『自分のスペシャルメニューの紹介文が書けたら、声に出して友達に聞かせよう』

「えーっ、声に出すの?」(興味津々で隣のをぞき込む)

『堂々とお客さんにアピールしよう』

声に出して読みあげることで、教室のあちこちからおいそうな雰囲気を醸し出す言葉が聞こえてきた。

「一度食べたら、もう我慢できないおいしさ!」

「味が盛り上がってくる感じです!」

「備長炭でさっと焼いてください」

「アワビのコリコリ感がたまらなくいい!」

思いもよらぬ言葉が隣の友達の口から語られると、味などを想像しているのかどの子どもも笑顔で感想を言い合う姿が見られた。

写真の料理を指さしながら発表する方も、自信をもって勧める口調に力が入っていた。



●資料3/自分のスペシャルメニューの紹介文

4 おわりに

日常生活で、普段から慣れ親しんでいるテレビの音声や、雑誌で目にしていた写真を吟味し、自分の作品と結びつけて書いたり読んだりすることは、子どもの言葉の可能性を広げる体験につながった。特に前半のテレビ番組の分析では、音(言葉)と映像を分けて考えることにより、言葉と映像の両方があってこそ伝わるものがあることに気づいた。また、同一の映像から想像できることは人それぞれで異なり、受け取る側の心に入る時にはさまざまな意味をもって変化していることなど、これまでとは違った情報の受け取り方を学ぶことにつながった。

また、情報の向こう側には「伝えたい」という人々の思いがあることを、後半の添え書きでの言葉選び、映像(合成写真)作成を通じて以前よりも身近に意識することができたと思う。情報の送り手として、何かを他の人に伝える時に大切な「具体性」を、五感にうったえる言葉選びによって身につけることができた。

情報の送り手と受け手である人と人とは、互いにその情報によって想像力を広げ、さらに新しい意味を見出すならば、それは新たな想像力を生み出すことにもつながっていく。

教室の子ども一人一人が、本当の意味で自分こそメディアの礎であることを架空のシェフという表現者の立場から自覚したことで、今後の言語活動や情報を扱う活動においてどのように自分の力を発揮していくかが楽しみである。